

湘南学園だより

No.99

発行  
湘南学園  
学園だより  
編集部

がそれぞれに多くの波紋をつくり、一部だけの力では成し得ない力となつていきます。大きなエネルギーを注いでいただけると、学園の組織活性化に期待が持てるのではないかでしょうか。

とは思いません。今後の学園は、教員の評価制度を確立し、その上で子供たちに対する評価のあり方や、偏差値以外の尺度が求められていくと思います。

この時期、学園はPTA会長の選挙に始まり、昨年の寄付行為改定まで新しい制度が出来上がりました。この新しい制度のもと、評議員信任選挙が行われ、引き続き法人運営を担う方が信任されることで、新たな気持ちで評議員を受諾された事と思います。これから行われる評議員選挙、理事選考への流れは、学園の新しい歴史の第一歩になる事としています。また、先の選挙で圧倒的多数を以て信任された結果も、今までの法人運営が評価され肯定されたものと感謝しています。

法人運営において重要なことは、多くの方に参加していただき、関心を持っていただくことです。そ

湘南學園理事長 薩田貞基



一部の方だけにと任せとなる傾向が多く見られますが、それは独断的運営が生まれ、関係者の参加意識が薄れ、組織としての活力が失われていきます。学園としてはそのようにならないために、広い視点に立った運営を目指しています。

そのためには、一人でも多くの方の協力が必要です。今回の選挙ではご協力していただいた役員、投票していただいた皆様のエネルギーが期待どなつて必ず賛否賛成票に伝わり、この連鎖がよりよい結果を生むと確信しています。システム造りの中、組織は有機的な個々の連鎖

親が世間を騒かせています。個別評議会が求められる医師、弁護士だけでなく、プロの意識にはプライドを持つ事が大切だと考えています。

また、プロである以上評価はつき物で、その評価は必ずプロ意識を育てるはずです。最近は、教員の評価制度が問題になっていますが、学校内においては教員が子供たちを評価するもので、それ以外はありますませんでした。子供たちが、行き過ぎた点数偏重による評価をされているのではと感じていました。

その様な環境の中、子供たちの自由独立、個性豊かな独創性が育つ

組織の中でもエネルギーが有効に働くためには、エネルギーを受ける側のプロ意識が大切です。しかし、昨年暮れに起きた建築の爆破問題は、プロに任せておけば問題ないという判断が当てにならないことが証明されました。今までもプロの倫理観の欠如からくる事

や考えにプライドを持って行動する事を信条とすれば、自信を持ちコミュニケーション能力が上がると思います。評価の高い学校にはプライドがあり、自信があります。そのようなプライドが、多くの面でプラスに働いていると感じています。学園の評価は、子供たちだけでなく全ての学園関係者に対する評価にもなっています。今後の湘南学園が、異なるプロ集団としてプライドを持った組織となることを期待してやみません。

次期学園長に藤岡貞彦氏を再任



ともになされました。藤岡氏以外に推薦は無く、理事会としてはそうした推薦を尊重しつつ、学内外の情勢を鑑み、藤岡現学園長の再任が最適であるとの判断を致した次第です。

藤岡貞彦現学園長の任期が今年三月末日をもって終了することから、理事会では昨年十月以降、次期学園長の選任をすすめました。その結果、十一月末の理事会において、藤岡貞彦現学園長（写真）の再任を決定致しましたのでここにご報告致します。

「一〇〇三年秋に施行された『学園長選任規程』では、新学園長を選任する際に、その候補者（学外の知識人または専任教員）を評議員および専任教員から推薦して頂くことができますが、今回の選任にあたってはその方法を採用し、候補者を学外の知識人の方、および現場の専任教員の双方から求めました。一ヶ月余りの受付期間において、八名の評議員の方より、藤岡貞彦氏の推薦が、「推薦理由」と

藤岡学園長は一橋大学名譽教授として、とりわけ「生涯教育」分野における第一人者です。一昨年四月に学園長としてお招き致しましたが、今日まで湘南学園第八代学園長としてその任にあたっております。湘南学園を幼稚園から

- ③校則の全面的な再検討
  - ④授業評価の必要
  - ⑤情報教育検討委員会の設置
  - ⑥学務委員会の設置
  - ⑦高大連携を柱とする進学指導のあり方

⑧学園の開放と授業の公開  
⑨学園内一貫カリキュラムの構築  
⑩保健室のあり方

施設設備の充実・教職員の研修・教育内容の改善の中で、ひとりひとりの子どもたちが、喜びと感動を体験し、自らの成長を実感でき

の場としての評価が高まるよう努力することが求められます。その評価の中心は、何といっても現在学園に通う園児・児童・生徒とその保護者、そして教職員の方々が湘南学園に誇りを持っているかどうかです。

現在、幸いにも幼稚園、小学校、中学校のそれぞれにおいて定員を大きく超える応募者があり、湘南学園の私学としての位置が堅固としたものになりつつあります。しかし、少子化の中で安定的に定員を確保することは今後一層厳しさを増すことは明らかであり、学園が現状に安住することなく、教育

改革へ」と教育の終点像と新しい教育の創造に向けた先頭に立つてこれまで。生徒に対するは、「世界に通ずる良識ある市民」となること、また、「代表的日本人」となることを呼びかけていました。そうした藤岡学園長の教育に対する熱い思いは、ウイークリーで出されているホームページ・ページに掲載されています。

今回提出された「推薦受諾書」にも、小学校の新校舎の建築、幼稚園のクラス編成替えを来年度以

## 中高における新たな方向

中学・高等学校校長 近藤正隆

昨年末、中高では教員会議においてクラス編成と進級指導体制等に変更することに決めました。公立中からは私立中が退学者を出していることへ批判がありますし、全ての生徒が希望する大学へ進学できる学力を付けさせるという課題もあります。生徒に学習指導を徹底させ、教科内容への理解を深めさせることで学習意欲を喚起させる必要があります。これを実施するには教員が目標を示して、互いに協力して生徒への指導にあらねばなりません。湘南学園の新たな発展を目指した取り組みであると考えています。

生徒に基礎学力を付けさせることを目指して変更する点は次の4点です。1つ目は中学校で入学した生徒は原則として中学校を卒業するまで指導する。これまでの中学校進級規程を変更する。2つ目は中学1年及び中学2年ではSクラスを設けず、全員の学力を向上させる。3つ目は高校での文理分科を高校2年で行う。ただし、中

学3年と高校1年ではSクラスを1クラス設ける。4つ目は土曜日の校時帯を平日と揃え、9時起床、3校時授業とする。

これらの4点には、すぐに実施できることもあるが、進行中であつたり、準備を要することより順次実施していくこともあります。たとえば、中学校進級規程の変更は本年度から実施できます。中1と中2でSクラスをなくすることは、現在の中1はSクラスがありますので、中2に進級してもSクラスを置く必要があります。従つて、中1、中2におけるSクラスの廃止は今年4月に入学する学年から実施となります。現中1は中2、中3、高1までSクラスを1クラス置き、高2で文理分けを行います。現中2は中1、中2とSクラスが1クラスありましたので、中3と高1ではSクラスを2クラスとし、高2で文理分けを行います。現中3はすでに文理分けが進行中ですので、高1で文理分けを行います。現在高1及び高2はクラス編成変更の対象にはなりません。また、土曜日の校時帯を平日に揃え、3

時数を変更する必要がありますので、平成19年4月よりの実態となります。中学校に入学した生徒全員を中学校まで指導することになりますが、これまでの成績や出席日数で一定の基準を設けていたことにも理由があつてのことです。しかし、中学校で退学者を出すことが許されない社会情勢であることは確かです。

そこで、退学者を出すことの見直しが迫られています。見直しは生徒が学習をしなくて良いとか、登校しなくても良いとなつては元も子もありません。生徒全員に基礎学力を付けさせることを徹底させて、成績が良くなるようにし、不登校の生徒を出さないようにする取り組みをしなければならないのです。また、中学校を卒業させることと中1・中2でSクラスを置かないことは一体をなしているのです。また、中学校を卒業させることと中1・中2でSクラスを置かないことは「一体をなしている」と考えています。すべての生徒を中1・中2段階ではSクラス並みの学力を付けさせること、学力の底上げを計ることにこそ目標があるのです。中高6カ年教育初期段階である中1・中2で底上げを計ることによつて、生徒全員を希望する大学へ進学できる学力を付け

ようとしているので今、湘南学園が抱えている教育の質を向上させるために、今回の新たな方向を決めたのです。

ただ、実現するのは決して易いことではありません。実施に不安を抱いている教員が多いことも事実です。生徒諸君の実情が実施しても実現できるようになつてはならないというのでしょうか。困難であつてもきちんと実施していくけば、生徒は変わります。実現するまではやまなければならぬと思つてはいます。その上で授業の方法を工夫したり教科指導内容を検討し、そしてカリキュラムの見直し、生徒指導の研究を同時に進めることが必要だということです。実施する上で、具体的な目標が定まつたことは確かです。ただ、今回の新たな方向はまだ十分なものとはいえません。実は、まだ検討中の事柄があります。今後、実施する事が決まった事項からお知らせしていくことにします。今回決まりた内容は、教員に対して学習面でのとりくみを大胆に押し進め、生徒の学力を付けることを目指して

# 山田剛先生お別れの会で、

## 学園長よりお別れの言葉を

### おわかれの言葉

学園を代表いたしまして、先生のご靈廟におわかれの辞をささげます。

先生の悲しい訃報は昨年十二月七日午後二時、学園に伝えられ、私は三時半に知らされました。

ただ驚愕の一語でした。絶句とはこのことです。ただにかなしいお知らせは全学園に伝えられ学内は服装一色となりました。

深いかなしみの中ですべての人たちが思い出されたであろうことは先生が最後の最後まで重篤の身をおして教育の仕事に貢献しておられたお姿でしょう。私は中高事務室へ三年生を連れて、受験のた

めの書類を届けにきておられた先生を何度もおみかけしておりました。先生の念願にはいつもいつも卒業を控えた三年生の進学や授業のおくれ、定期演奏会をひかえた山田オーケストラの練習がなしだされないことでしょう。しかもそれはつい先日のことだったのです。

私の手もとに山田先生ご夫妻からの連名のお手紙がとどいたのはなんと十二月三日のことでした。

山田夫人・佳子さんは「私もお休みをいただけたことで二人ともお互いがゆっくり療養に専念できております。先生にも大変ご心配をかけており、他の皆様からのおきもちもあわせ私どもの支えとなつております。先のことは分かりませんが前向きに日々過ごしております」と書いて下さっていました。

ご夫妻が「前向きに日々過ごしておられたのは、わずかその四日前のことだったのです。涙がとまりません。おもえば十

月一日アリーナでの演奏会でタクト台に上がる前に私はかけよって「今日は代わりの人ではないのですか」と声をかけたところ、先生は笑っ

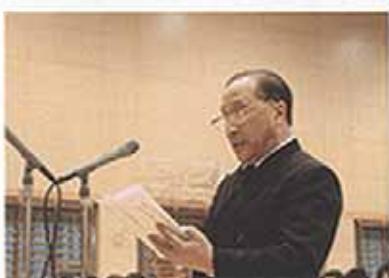
て「いえ、私の出番です。お恥ずかしいできですが聞いてください」とこたえられました。その日が先生最後の演奏会となるとは、涙をこらえて、佳子夫人も席におられたことでしょう。十二月十七日に幼稚園の終業式がありました。

中高生たちがプラスバンドを幼稚園の弟妹たちに聞かせるというのでも私も出席しました。ジングル・ベルの演奏からははじまって三十分間アンコール、アンコールの拍手がおわるまで満場は一体となり、メリクリスマスを祝う場となりました。これこそ学園が一つの村であることをしめす心あたたまるシンです。実は山田オーケストラの幼稚園開園も故山田先生のご発案だったと聞き涙がとまりませんでした。

山田先生の葬儀は、去る12月9日にお通夜が、翌10日には告別式での旅立ちでした。山田先生の葬儀は、去る12月9日にお通夜が、翌10日には告別式での旅立ちでした。

1月12日に行われた山田剛先生お別れの会で、藤岡学園長は上記のお別れの言葉を述べました。その全文を掲載します。

### 山田剛先生が逝去



学園長がお別れの話を

が平塚斎場（平塚市）において行われました。これらの葬儀には、はじめとする法人役員、藤岡学園長をはじめとする教職員、小田PTA会長をはじめとする保護者、生徒、同窓生など湘南学園関係者が多数参加しました。9日に行われたお通夜では焼香する長い参列者の列が出来ていました。また、10日の告別式に対して学校として、授業を2校時まで切り上げる配慮をしました。

### 前向きに生きていた

山田剛先生は平成7年4月1日に湘南学園中学高等学校に理科教諭として勤務しました。専門分野は生物で、理科ではとくに第1分野である物理と化学に比重が置かれていましたが、生物を高校段階で勉強できるような体制にすることを主張しました。高校で理科選択に生物を入れるように奮闘し、実現しました。また、中学高等学校では担任の果たす役割が大きいことを深く認識していました。特に、生徒の将来に係わる大学への受験指導に対して関心を持っており、

が平塚斎場（平塚市）において行われました。これらの葬儀には、はじめとする法人役員、藤岡学園長をはじめとする教職員、小田PTA会長をはじめとする保護者、生徒、同窓生など湘南学園関係者が多数参加しました。9日に行われたお通夜では焼香する長い参列者の列が出来ていました。また、10日の告別式に対して学校として、授業を2校時まで切り上げる配慮をしました。

安易に妥協して欲しくないと話していました。そのためにも6年間担任として持ち上がり、生徒の成長を見届けながら進学指導をすることを考えていました。現高校3年生ははじめて中学1年生から持ち上がった学年でしたから、この生徒たちを大学へ進学させ、卒業をさせたいとの思いがことのほか強かつたようです。それが果たせぬまま帰らぬ人となってしまったことは、さぞ無念だったことでしょう。想像するにもあります。

一方、山田先生は湘南学園で勤めるところ決まる、すぐに吹奏楽部の顧問として生徒への指導にあたり、顧問会議への出席、大会への参加、定期演奏会の開催、学校行事での積極的な役割を果たすよう吹奏楽部を指導してきました。一昨年平成16年11月15日に行われた新校舎落成記念式典で吹奏楽部が演奏や校舎案内をしたことが、式典参加者から高い評価をえました。

山田先生は吹奏楽部の練習のため休日も休まず学校に出でました。顧問として、人間として、その然心な教えや係わりに影響を受けた

生徒が多く、山田剛先生は吹奏楽部にとって欠かすことができない存在でした。

### 1月12日にお別れの会を

湘南学園では、山田剛先生が去ったままに「お別れの会」を行いました。全校生徒、教職員、保護者がアリーナに集い、しめやかな中にも、整然とした心のこもつたお別れの会となりました。

このお別れの会は「起立して1分間の黙祷」ではじまりました。藤岡学園長から前ページのお別れの言葉が感情を込めて語られました。引きつづいて、中高6年間で5年間担任をしていただいた高校3年D組の谷津祐介君から体験を交え



山田佳子さんあいさつ



お別れの会

た話がありました。その後、吹奏楽部が山田先生から指導していた楽部が山田先生から指揮して、吹奏楽部部長だいた曲を演奏し、吹奏楽部部長の柴田達也君から心のこもつたお別れの言葉がありました。遺族の言葉が感情を込めて語られました。引きつづいて、中高6年間で5年間担任をしていただいた高校3年D組の谷津祐介君から体験を交え

た話がありました。その後、吹奏楽部が山田先生から指揮して、吹奏楽部部長だいた曲を演奏し、吹奏楽部部長の柴田達也君から心のこもつたお別れの言葉がありました。遺族の柴田達也君から心のこもつたお別れの言葉がありました。遺族を代表してお札の言葉が山田剛先生の奥さんである山田佳子さんから、先生の目指していくことを深く心に刻んでもらいたい。」とのお話をありました。献花に移り、遺族、学園長、生徒の献花となりました。最後に、保護者と教職員の顔に行われました。なお、この献花に使われたカーネーションはPTAからのご協力によるもので、お別れの会は学園全体の取り組みになつたことを感謝しています。

## 「自分で決めた 目標に向かって…」

保育主任 青木 萬里子

始業の朝、「冬休み、縄跳びに一生懸命挑戦してたんですよ。あきらめないで頑張るんです。親は寒くてかなわないんですけどね。」と、あるお母さんが話されました。

きっと、自分で決めた目標に向かって何度も頑張っている我が子の姿に成長を感じられたのでしょうか。

また、子どもからは「先生、三回しか跳べなかつたんだけど、冬休みにお父さんと練習したから一八回跳べるようになったよ。お父さんは『うまいね!』って言つてた!」背中を丸めてドタバタと縄をまたいでいたこの子はリズミカルに、沢山跳びたいという自分自身の目標に向かって練習をしたようです。

この二つの話を聞いて「やっぱりね! 湘南学園の子どもは自分がやりたいことを自分で決められるから、本当に偉いな!」と感心したり納得をしてしまいました。子ども自身が頑張ろうとする気持ちを持つことが一番大切な事なのですが、それにも増してお家の方が子どもの関心事に付き合い、寄り添つて上げた成果であることも

確かにことではないでしょうか。

親子の間に、励ましの言葉掛けや頑張りを認めてあげる言葉が交わされ、親子で喜び合う光景が目に浮かびます。

実は、二学期に年長児の間で、縄跳びに挑戦する事が盛んになつていきました。「先生、見てて!」「前跳びやるから、数えて!」と、友だちを押しのけて自分の頑張りを何度も披露してきます。

走り跳び、前跳び、後ろ跳び、じやんけん跳び、ケンケン跳び、二人跳び、あや跳び、二重跳び、ハヤブサ連続跳び、憧れの跳び方は、連続ハヤブサあや跳び。いつの間にか多彩なメニューが並びました。

目標に向かって、朝からとことん跳び跳びに挑戦を続ける子どももいれば、いつの間にか縄がごっこ遊びのブランコの紐に早変わりする子どももいます。自分の遊びを楽しみながちも、友たちの頑張りはしっかりと見守り、「○君は上手なんだよ。知ってる? 小学校のお兄ちゃんより上手なんだって凄いよね。」

と自分の事のように感激する子どももいます。あきらめないで何度も挑戦する友だちの姿に触発されたり、流行ってるのがさ…などと楽しいことや辛いことをよく聞きました。「クラスの子がね!」「明日は運動会なんだけど…」「最近子どもたちで流行ってるのがさ…」など

熱心に取り組む姿も増えています。

「おい! がんばれよ。やれば出来るからな!」でも初めは誰でも出来ないからね。」と小さい先生たちの説得ある励ましの言葉が、三学期も聞かれます。

## 「一人の保育者として」

年長組担任 村上 義則

私の夢は「教職」でした。先生という職業に小さい頃から憧れを抱いていました。

でも、その頃は特に幼稚園の先生というのではなく、どちらかといふと中学校、高校の先生になりたいという思いがありました。歴史が好きだったので、社会や日本史の先生になりたいと思つていました。そんな夢から幼稚園の先生になろう! という思いに変わったきっかけは高校の先輩の存在で、卒業後幼稚園に就職し、日ごろから幼稚園での様子を聞いていました。

この「これがきっかけになつたのです。

「クラスの子がね!」「明日は運動会なんだけど…」「最近子どもたちで流行ってるのがさ…」など

紙を見せてくれることもありました。話を聞いているうちに、「幼稚園の先生か面白そうだな。」と思うようになりました。

先輩のいろいろなアドバイスや協力などの後押しもあって、「保育者になろう!」と決意しました。

学校では授業のほかに実習もあり、毎週一回幼稚園で実習を受けていました。普通は三週間や四週間連続の実習を行う学校が多いのですが、

私の学校では、年間を通して子どもたちの園生活や成長が学べるよう、毎週一回というカリキュラムが組まれていました。元々子どもが大好きで、近所の子どもたちと接することも多かった私は、実習がとにかく楽しかったです。園の敷地内にある山に走つて登つたり、高い木に登つたり園内すべてを使つたかくれんぼをしたり、泥だらけになつて山を作つたり…と、子どもたちと一緒に遊んでいました。

まだまだ保育者を目指している男性は少なく、クラスでも五分の一ほどしかいませんでしたが、ほ

とんどの男性の希望がかなって幼稚園に就職しました。私も湘南学園での、保育者としての生活がスタートしました。

湘南学園幼稚園ではこれまでに男性保育者という前例がなく、まさに私が学園始まって以来の男性保育者になりました。それゆえに男性としての保育者という期待があり、その中では、女性はない、男性ならではのなにかをしなくてはいけないのではないかということを感じ取りました。それは今までにはない計り知れない緊張感でした。

男性保育者として、私に期待されているものはいつたいどんなことなのだろうか? 女性にはないもの、男性だからできるもの、それはいつたいなんだろう? と考える事があります。女性の職場だった中に入ってきた男の私にこういうことを望んでいる! というのは少なからずあると思います。しかし正直なことを言うと実際それが何なのかはよくわかりません。でも、男性だから、女性だからといふことではなく、子どもも一人ひとり違う個性があるように、少なからず得手、不得手というも

のはあると思います。ピアノも決して得意ではありません。口調も強くなってしまうこともあります。いろいろと苦手なものはあります。ただ、体を動かすことに関しては誰にも負けない自信はあります。

1年目のころは、フリーの立場から、思う存分遊ぶ時間が与えられ、とにかく園庭を走り回っていました。

ドッジボールでは、怒り真剣になつて狙つたり、逃げたりしました。子どもたちも「よし、先生当てるぞ!」と、どの子も躍起になつて私を狙つてきました。その姿を見ていた周りの子達もたくさん参

加してくるようになりました。ドッジボールを繰り返していくうちに、次第に「ボールの取り合いになつたらじやんけんで決めよう」「ボ



ルを取つたらすばやく投げるんだよ」と、子どもたちと同じ目線、同じ気持ちになり、一緒にになって楽しめました。私自身が子どもと同じ気持ちになつて関わることで、

内だつたり、どろけいでは泥棒が成れたときには休憩所を作つて決めたりもしていました。子どもたちの力で遊びを展開していく姿に「子どもの力ってすごい」と、

感心しました。私も子どもたちと一緒にになって、ただひたすらにがむしゃらになって遊びました。

そういう子たちの姿のなかで、保育者が現場で求められるものとはどういうことなんだろう?

子どもたちの持つている力をよどみながら毎日が過ぎていきました。

子どもたちの持つている力をよどみ多く引き出していくことの重要

さや、どの程度保育者として介入していくべきかという部分で、私は悩みました。保育者が手を添えれば簡単に出来てしまう部分で、子どもの力でできなければ意味がありません。子どもたちが意欲的に取り組めるためにはどうすればよいのか、援助の仕方、保育者のいる意味というところを自分なりに考えていました。

まずは今自分ができることをし



ようと、子どもたちと同じ目標、同じ気持ちになり、一緒にになって楽しめました。私自身が子どもと同じ気持ちになつて関わることで、

それまでわからなかつたことがなにか見えてきたように思います。それが男性だから: というものではありませんが、今自分ができることというのを最大限に活かし、保育をしていく中で子どもの気持ちや思いを受け止めていくことがあります。

まだまだ私自身の課題は山のようにあります。子どもたちにいろいろ教わりながら、毎日が充実した生活が送れるよう日々変化していく子どもたちの姿をきちんと捉え、子どもたちに頼りにされる、そんな先生になりたいと思います。

# 音楽会について

吉津句子

暖かな秋の一日。今年も録音芸術館大ホールに子供たちの元気な歌声が響き渡りました。いつもとはちょっと違う雰囲気を感じているようで、さらさらと輝く瞳がとても素敵です。

さて、本番の前に发声練習です。  
保護者の方々が座席に向かう中、  
いつもの歌から始めます。

♪夜が明けた

アラム  
カタカナ

七八三

など数曲を歌い座ります。

そして、いよいよ本番。校長先生の挨拶が終わると、トツブバッタード

は三年生。クラス合唱です。クラスの先生の指揮をよく見ながら、二つのパートに分かれて二部合唱。

なんできれいな声でしょうか。元気さと緊張が空回りして怒鳴り声になりがちな子供たちですが、自



「はあ！ 先生どうしよう。」「どうどうしちやう。」

「大丈夫。いっぱい息を吸つてね。」  
一年生は全員でにぎやかな百人。  
しかし大きな舞台に上ると、な  
んだかとても少なく感じます。

一曲目、うてるてる坊主

日本の昔からの歌を大切に伝えてゆきたいという選曲です。運動会や遠足などの前日に作る、てるてる坊主。作るたびにこの歌を唱えてくれるのではないかと思ひます。

「てるてる坊主…」のフレーズから始まる高い声は、とてもきれいな優しい声でした。

二曲目は、つかづば

歌の最後で両手が一齊に天井へ上がる。「可愛い。」と会場から声と拍手。子どもたちの顔も嬉しそうでいっぱいになりました。

タ「へ、はじめましてシユーベルトさん」です。お話を題に加え、「ま

ナ「魔王」「音楽に寄せて」

「守歌」などを学年合唱し、今回はドイツ語の歌にも挑戦しました。



三人の作曲家が作った合計三曲の歌」  
テの「のばら」をクラスごとに見  
事に次へまへ。学年での取り組

みということもあり、担任の先生方と毎日話し合いながら進めていくことで、最高の音楽劇になります。

## 「児童会の日」 子どもの思い大事に

若月由香

「冬祭り」のようなイベントをや  
ろう!児童会執行委員の子ども

たちからこんな声があがりました。

この時執行委員会でされた話し合

いの中、子ども達が「自分達の  
手で作りたい」という気持ちを強

く持つていてそれを実感しました。

バーティー当日は、代表委員がゲー  
ムの進行役を務めました。三種類

のゲームを児童会班がおこない、  
ゲームとゲームの合間に作戦タ

イムをはさみながら、班同士で得  
点を競いました。

ゲーム内容が徹底されていない、  
などの不備があったものの、事前

の準備から当日の運営まで子ども  
たちなりに一生懸命取り組む姿が

ありました。

だれかに「させられた」のでは  
ない活動は、大変がつきものでした。  
しかし、や  
り終えた後

の爽快感は、  
自ら行動し  
た者だけが  
味わえる感  
覚です。

私は、是  
非子ども達  
に自分の手



## 二〇〇五年度スキー教室

植松浩之

秋口からはじめたスキー教室の  
準備中、なにより気掛かりだった  
のはゲレンデのコンディションで  
した。

近年の暖冬傾向の影響下、つい  
に昨年度のスキー教室では二本の  
ゲレンデしか開通せず、たいそう  
不自由な思いをしたと前任の錦織  
先生から聞いていたのです。

（ゲレンデがなければ寒冷地での  
草スキー教室になってしまいますじ  
ゃないか。どうしたもんか……。）

ときには掠める覚束ない気持ちを  
横目に見ながら各方面との打ち合  
わせや、ご家庭のみなさんと児童  
へのオリエンテーションを進めて  
いきました。

（やれやれ！なんこつた！）

と、凍てつく山頂で私は深いため  
息をつきました。そして、まわり  
の子どもら

と一緒に渋  
をたれながら  
声をたてて  
て笑ました。

（スキー教  
室は楽しい  
かね？）

（サイコー  
さ！）

そんな余長者の心配もぐへやら、  
児童は楽しむ一方のようですね。  
雪が降るが降るまいが、学年の  
仲間といっしょに親元をはなれて  
寝食をともにできるのだ。それだけ  
で愉快に決まっていると言わん  
ばかりです。

で作ることの喜びをひとつでも多く味わって欲しいと思います。また、それができる児童会活動作り、子どもたちの自治の力を高めていくことを目指していきたいと思いまます。

児童たちの気持ちの昂まりに丸  
まり加減の背を押され、励まされ  
ながら、細目を詰める仕事に当た  
ります。

だらうさ。）

軽井沢からもどり一月が経とう  
としています。いま湘南の地で考  
えなおしてみても素晴らしい四日  
間であつたと思いません。アウトド  
アスポーツを柱とした学習活動だ  
けに天候に恵まれたのが第一です。

えなおしてみても素晴らしい四日  
間であつたと思いません。アウトド  
アスポーツを柱とした学習活動だ  
けに天候に恵まれたのが第一です。

た軽井沢のスキー場は真っ白け。  
ゲレンデもほぼ全コース開通です。

ゲレンデもほぼ全コース開通です。  
ゲレンデもほぼ全コース開通です。



参加者全員が病院はおろか宿舎  
内に保育室にすらほとんど世話を  
けけれど、実りをもたらした主因が  
ほかにもいくつかありました。  
アスポートを柱とした学習活動だ  
けに天候に恵まれたのが第一です。  
えなおしてみても素晴らしい四日  
間であつたと思いません。アウトド  
アスポーツを柱とした学習活動だ  
けに天候に恵まれたのが第一です。

た軽井沢のスキー場は真っ白け。  
ゲレンデもほぼ全コース開通です。

ゲレンデもほぼ全コース開通です。  
ゲレンデもほぼ全コース開通です。

一人一人を認めるために

—生活指導委員会主催  
研修会を終えて—

中高生活指導主任

清水一伸

講演は三十六枚におよぶスライドを使いながら、具体的なお話なども聞くことができました。以下はその時のスライドの内容です。特に印象にのったところをまとめていただきます。

最初は、「気がかりな手元のたち」というスライドでした。

- じっとしていられず、絶えず動いている。
- 気が散りやすい。落ち着きがない。
- 興奮しやすい。気分が変わりやすい。
- 持続力に欠け、最後まで取り組めない。
- 相手や状況に関係のない自分勝手な言動

力も身に付いていくということです。「一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育支援を行なう」ということになるので、場は設けられないということです。

官の榎森洋田先生をお招き致しました。榎森先生は、「一人一人を認めるために、軽度発達障害児の理解と支援」というテーマで約二時間の講演となりました。榎森先生の専門分野は情緒障害です。研究所では小・中学校支援員やLD・ADHD等も担当されています。また、特別支援教育士スハイバイザーとして活躍され、横浜国立大学非常勤講師もなさっています。中高生様の研修会ですが、中高の教員だけではなく、幼稚園・小学校、義務の先生方にも多数参加していただくことができました。

- 突然、予想もできない行動をとる。
- 約束やルール等決められたことが守れない。
- 好きなことだけ取り組み、嫌いなことは我慢する。
- 物をよくなくす。忘れ物が多い。

等々

はあるお子さんはたくさんいますし、過性のものとしては、私たち大人にでもあり得る項目だということです。

ある児童・生徒は6.3%だそうです。それで文科省では「特殊教育から特別支援教育へ」という考え方の変換を図っているということです。普通の教室に6.3%の配慮の必要な子がいるわけで、その子どもたちには特別な援助が必要ないが、通常のクラスの中で配慮していくことで適応力は高まっていくし、学習障壁を力も身に付けていくというのです。「一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育支援を行う」ということになるので、場は絞られないということです。

【特別支援教育は何を支援するのか】【解説】度発達障害とは】【軽度発達障害の悩み】といふお話を久松先生は進みました。

**【勢】**（かかわりのポイント）【学習面での工夫】  
【減らすべき問題行動か】**【不適応行動への対処】**というスライドでは具体的なお話がありません。  
そして【配慮の必要な子どもへの支援】というスライドになりました。

性等に問題があるから特別な支援が必要な」といふことです。

とです。ですから、診断があつても適応状況が悪い子どもについては特別な支援が必要ですが、診断がついていても適応状況がよい子どもについては、気する必要はあるが、特別な手当が必ずしも必要とは限らないと再考したことでした。ということは、診断がついていてもいなくて同じじことです。診断がついていない子どもたちは、個性といわれるわけですね。診断がついているから特別な支援が必要ということではなく、学習・行動・社会

昨年の研修では、カウンセリングマインド、進路指導を例にじつと、という演題で頗る感動の方法について研修をしました。今年度、この研修を通じてお子様一人一人を認めるなど、集団での支援体制を築くことがみんなが安心できるクラスになり、学校になっていくということを改めて考えるきっかけになりました。

「人一人を認めるため」この言葉は学園の生徒指導上重要なキーワードとして温め、深めて行きたいと思います。

- 参加しやすい授業」→「授業の三六一サルデザイン化」ということです。【まとめ】「がんばっても期待通りで進まない子どもがいる。」
- 発達障害が不適応にならがるのではなく、居場所がないことが不適応にならがる。
- わかりやすい環境と間わりで安定していく集団で認められることで成長していく。
- 教師が対応に困っている子どもは、本人がもつて対応に困っている。
- 本人の努力だけではできないが、適切な支援があればできるようになっていく。
- 一人一人を認める」といふんなが安心でき

く、全ての子どもたちへの支援にも共通のことである」というお話をしました。

【効果的にはめる、叱る】保護者の思いの揺れ動き【保護者とともに】事例検討会についてのお話がありました。

最後に【授業の二三六・サルデザイン】「配慮の必要な子どもへの支援は、他の子よりもたんにとも支援になつていい。学校全体が落ち着いてくる。学校全体の学力の向上につながっていく。全ての子どもにわかりやすく、

## 二〇〇五年度校内大学入試説明会について

中高学習進学指導主任

服部 基樹

昨年度より体制を一新した学習進学指導ですが、「六カ年の進路指導カリキュラム」の編成を目指して、いくつかの取り組みを展開しています。その指導カリキュラムの大きな柱の一つとして「高大連携」があげられます。

この高大連携の第一歩として、昨年度より「校内大学入試説明会」を実施しています。この説明会は、いくつかの主要大学について大学の人試験の方や教授を校内にお招きして、各大学の学部・学科の概要、入試制度、受験上の留意点などについて説明していくところです。高三生を中心に、高一生・保護者の方にも参加対象を広げています。この説明会に出席することで、大学に出向かなくてもまとめて情報収集ができる、資料入手も可能なため、多くの生徒・保護者の方々が参加されています。

また、各大学の説明に留まらず、大学が求める学生像、大学進学に必要な学力、入試に向けての学習方法といった点についてもお話しいただきました。

大学入試に対するモチベーションを高める絶好の機会にもなっています。

今年度もいくつかの大学について説明会を実施しましたのでご報告させていただきます。

昨年度の説明会実施大学は難関・上位の私立大学だけでしたが、今年度は私立大学に加え、主要な国公立大学法人（以下、国公立大学とします）についても説明会を実施しました。今後、国公立大学への進学を強化していくという方向性の元に実施したもので、参加対象も高一生まで広げました。

難問・上位私立大学については夏休み前に三回にわたり、六月二十五日（土）には中央大学・法政大学・明治大学、七月一日（土）には上智大学・立教大学・東京理科大学・芝浦工業大学、七月十六日（土）には慶應義塾大学・早稲田大学の、計九大学を迎えて実施しました。

どの大学も大学改革に取り組んでおり、キャンパスの新設、学部・学科の再編、入試制度の改革など、新しい情報が満載で、各大学の特色がはつきりと見て取れる内容となりました。出席者は生徒は高三生・高二生を中心にしており、保護者は七十人にもなります。

皆、熱心に説明に聞き入っていました。

国公立大学については、各大学との折衝に時間がかかり時期が遅くなってしまいましたが、十一月

二十六日（土）に横浜国立大学・

横浜市立大学・首都大学東京・一

橋大学の、計四大学を迎えて実施しました。このうちの一橋大学は

高校へ出向いての説明会はあまり

実施していないようでしたが、こ

の大学で長く教鞭を執っていた

藤岡学園長の力添えもあって、神

奈川県内の高校で初の説明会実施にこぎ着けました。また、横浜国

立大学からは入試実行委員長をな

さっている大学の先生が来校し、

大学の紹介や大学の選び方といっ

た点に重点を置いて語って下さい

ました。国公立大学は法人化され、

それぞれの大学で特色作り、学生

募集に取り組むことになり、苦労

がうかがえました。

生徒は高二生・高一生を中心

六十人、保護者は四十人もの出席

がありました。国公立大学は学園

生にとってまだよく知らないと

いうところですが、特に私立大学

と国公立大学の違い（教授数と学

生数、研究費など）については新

しい発見があつたようです。また、

今後の進路指導にとつても参考と

うな話があり、生徒だけでなく、

大学の選び方については後述のよ

うな話があり、生徒だけでなく、

医・歯・獣医、今年から薬も六

年制に。四年制でも大学院の進

学率は既に八・九割に達している。

文系でも法科・会計・教育職で

は大学院進学が求められ、もは

や「大学は六年間」と考えた方

がいい。

大学院については、それぞれ

教育の内容にかなりの差がある

のが実情で、各大学院の内容は

よく調べないといけない。また、

大学院進学を考えるとき、その

大学院に付属の大学からの進学

の方が有利。このため、進路選

択は大学選びではなく、「大学

院選び」をしなければいけない。

この入試説明会は入口であり、今後

「模擬授業」「研究室訪問」「授業

聴講」なども実施の可能性を探って

行きたいと思っています。また、産

業界との連携である「産学連携」に

ついても現在模索中で、「六カ年の

進路指導カリキュラム」の編成に向

けてさらに研究を重ねてまいります。

## 永年勤続表彰

### 平井満先生、古市好文先生

湘南学園では、多年にわたり湘南学園の発展に貢献した教職員に對して、表彰をしております。今年度は中学高等学校で、30年間の長きにわたり勤続して参りました平井満先生と古市好文先生を永年勤務で表彰しました。両先生は共に、昭和50年4月1日より今日まで、社会科教員として教壇に立つております。平井先生は日本史が専門で、高校1年の学年主任をしております。一方、古市先生は世界史が専門で、社会科の主任をしております。お二人は湘南学園中学高等学校で指導的な役割を果たしております。重鎮として存在感があり、重要な役割を果たしております。

現在、湘南学園では若い先生方が増えており、両ベテランには若手の育成という課題を果たしていただきたいと考えています。また、湘南学園が発展する上で示唆をしていただけるものと思つて

います。

なお、永年勤続の表彰は、これまで年頭に全教職員が幼稚園ホルダーに集まり、「初顔合わせ」を行い、その中で授与してきました。本年は「初顔合わせ」が行われませんでしたので、「学園だより」の紙上で全校に紹介させていただく方法をとりました。中学高等学校では1月10日の打合せで披露させていただきました。両先生には、藤園学園長より表彰状と記念品を授与していただくなっています。

したので、【学園だより】の紙上で全校に紹介させていただく方法をとりました。中学高等学校では1月10日の打合せで披露させていただきました。両先生には、藤園学園長より表彰状と記念品を授与していただくなっています。

第8回目の展示会として、湘南学園を取り上げることになりました。

「なつかしき学び舎 その2 湘南学園」として、「鵠沼村の時代」と共に、湘南学園を取り扱うことになりました。

## 2月・3月の予定



2月1日	中	入学試験(3日)
3日	幼	豆まさき
6日	中	入学試験2次
15日	幼	年長子供会
17日	小	制作展
18日	小	制作展 器楽発表会
23日	幼	年少・年中子供会
25日	小	半日入学
26日	中	新入生予約受け渡し
28日	幼	誕生会
3月2日	中高学年末試験(17日)	
3日	小	5年学年末試験(14日)
8日	中高試験休み(9日)	
11日	高	卒業式
13日	小	児童会お別れ会
16日	幼	卒園式
17日	小	P.T.A.教育文化事業
18日	小	終業式
21日	小	編入試験
22日	中高修業書渡・販売	
23日	中高修業書渡・販売	